

あった。すなわち、輸血、麻酔、抗生物質と書けば満点であった。当時を思えば、現在のロボット手術、内視鏡手術、分子レベルの知見の進歩は目をみはるものがある。これは別の専門の図書をたずねなければならぬ。

しかし、これまでの歴史を顧みて、先人の知恵、経験を生かすことはきわめて重要である。この意味で本書が、外科学の古代から近世までの指針としては、大きな役目を果たすに違いないと思う。外科系以外の人々にも推奨できる。

最後にもう一つ優れているのは、固有名詞の記載が原音に近く、綿密に調査されている点である。ともすれば、特に英語以外はいい加減な記載が多いなかで、正確さに感銘を深くした。

ただ、ピエール・テソーは綴りを見ると、このように発音したくなるが、フランス人医師は「ドウソー」と発音する（p.二二九以下数箇所）。これは私がフランス留学中、実際に確認している。「パイロニー」（p.二四〇）は、「ペロニー」であり、「バジエット」（p.二〇六）は「バジエツト」である。私は整形外科医なので、専門用語の誤りも気になる。例えば、「骨のご指定」（p.三三）の意味は解説が欲しいし、「橈骨下端」（p.一七三）は整形外科学会、解剖学会の用語は「・遠位端」と定められている。（ミスプリントと思われるが、p.二九六では「橈骨」が「撓骨」になっている）是非、改訂の機会に訂正を希望したい。

色々、失礼な言葉が重なったが、これは本書の価値をい

ささかでも失わせるものではない。

（小林 晶）

〔時空出版、東京都文京区小石川四一八一三、電話〇三一三八二一五三三三、二〇〇五年八月一日、B五判、二四八頁、本体価格三〇〇〇円〕

酒井 シヅ 編

#### 女医吉岡弥生の手紙「愛と至誠に生きる」

本書は、明治二六年に医師となり、のち現在の東京女子医科大学の前身である東京女医学校を創設した吉岡弥生の書簡集である。書簡は東京女子医科大学史料室に保管されているものに今回の企画のために新たに収集されたものが加えられ、それぞれ同史料室の調査に基づいた詳細な注が付されている。

構成は巻頭の「グラフィティー吉岡弥生」で、その生涯を写真で辿り、さらに「吉岡弥生と女子医学教育」で吉岡弥生の前半生を中心に解説し書簡集へと導く。書簡は、第一部「女医を育てて」、第二部「試練に耐えて」、第三部「幸せな晩年」と分類され、年代別に紹介される。個々の書簡には注の他に適宜解説もつけられている。さらに東京女子医学専門学校・女子医科大学の卒業生による「私の吉岡弥生」、略年譜、最後に書簡の内容に呼応するきめ細かい解

説がある。

第一部は明治三四年の吉岡荒太との連名の年賀状に始まり、戦後の昭和二〇年一〇月の新卒業生への訓辞で終わる。この間は弥生の生涯における活動期ともいえる時期である。ここで注目されるのは、付属病院新築の折の書簡で、「幸いに快晴その機を得ば、展望富士の美はもって御散策の一興たるべく、さらに院内多少の新工夫を凝らし候点につき」と、当時の弥生の浮き立つような心境が生き生きと伝わってくる。また昭和十二年に第二病棟が竣工した際の「もって総合病院としての完全なる機能を發揮致し、時代に即する病院の使命を果たすべき覚悟」という言葉からは、学校・病院を率いる弥生の自負を見て取ることができると、これらを遡って明治四一年の兄鷺山謙作に宛てた東京至誠病院の移転と引越しを告げる手紙と比較すると、弥生の成し遂げてきた事業が、弥生自身を大きく成長させていることがわかる。ともすると「女傑」という印象を受けがちな弥生の生の姿が伝わるのは書簡ならではないことであろう。また選挙粛正運動に関する書簡からは、弥生は、あくまで医業中心という生活の軸を揺らすことなく、実際の活動は市川房枝などの実務者に一任していたことがわかり、多様な活動の秘訣を見る思いがする。

このように第一部だけでも、さまざまな吉岡弥生像が浮かび上がってくるが、本書で殊に印象的であったのは弥生と卒業生との交流である。特に第二部の書簡からは卒業

生が公職追放となった弥生を思い、またそれに応える弥生の姿を知ることができる。編者が解説で指摘する「家族のような存在であり、親戚以上の力で弥生を支えた」卒業生が、あたかも全国に散らばった弥生の分身のように、社会活動を封じられた弥生に代わって、学校の存続と昇格に心血を注いだことが読みとれるのである。

この書簡集を読み進んでいくと、吉岡弥生その人は、現代の女性にとってもなおロールモデルとなる人物ではないかと思われる。弥生は、医師としての誇り、校長としての気概と経営手腕、社会人としての自覚と責任感、そして向上心を持ちながら人を育て、弥生自身も絶えず成長した。しかしまた、自らがわが子のように育んだ人々に支えられていたのである。弥生が弥生たり得た理由は、まさにここにあるのではないか。

本書は女性が女性としてあるがままの姿で、かくも成長するという実例を伝えている。編者や東京女子医科大学の卒業生によって本書が企画された意図の一つは、あとがきにもあるように弥生の書簡を通して、それを現代の後継者達に伝えたいということであろう。医学を学ぶ女性のみならず、多くの若い女性に手にしてほしい本である。

(三崎 裕子)

〔N.T.T出版株式会社、東京都目黒区下目黒一―八一―アルコタワー、電話〇三―五四三四―一〇一〇、二〇〇五年五月二〇日、A五判、二八六頁、定価一九〇〇円〕